

メーユ通信

豊かな海へ 科学の力で



東京大学大気海洋研究所 プロジェクトメーユ ニュースレター

Tokyo Ecosystem-Associated Marine Sciences since FY2011
No. 11
3.March.
2018

大槌から 見えてくるもの

特集



メーユの クイズにチャレンジ!

大槌港を船籍とする「新青丸」は
どんな目的の船でしょう?

1. 自動車運搬船
2. 学術研究船
3. クルーズ客船



ページをめくって
答を探そう!!

国際沿岸海洋研究センター屋上にて
前列右から峰岸有紀、木暮一啓 (TEAMS機関代表)、河村知彦 (沿岸
センター長)、野畑重教、後列右から吉澤晋、福田秀樹、早川淳

本冊子は東北マリンサイエンス拠点形成事業における広報の一環としてプロジェクトメニューが発行するものです。活動内容や研究成果はウェブサイトからもご覧いただけます。

東北マリンサイエンス
拠点形成事業
<http://www.i-teams.jp/>

プロジェクトメニュー
<http://teams.aori.u-tokyo.ac.jp/>

「メニュー通信」のバックナンバーは、当サイトでご覧いただけます。

CONTENTS

特集

大槌から 見えてくるもの

～TEAMS 機関代表・
木暮一啓教授に聞く～ … 3

沿岸センターアーカイブ
写真で振り返る
沿岸センター… 8

生き物図鑑 第11回

スナメリ … 9
東京大学大気海洋研究所
兼務教授 白木原 国雄

街歩き 第11回

「食」と「農」でまちを元気に
—この店から新たなチャレンジを— … 10
カフェレストラン「Ce-Café」
阿部 敬一さん/智子さん

はまさんの台所 第11回

マグロづくし … 12
クロマグロについて
意外に知られていないその一生
国際沿岸海洋研究センター
准教授 北川 貢士

メニュー通信 第11号 2018 春

発行日/2018年3月1日
発行/東京大学大気海洋研究所
(プロジェクトメニュー事務局)

○企画・編集/木暮一啓(編集長) 佐藤
克文(編集委員) 渡部寿賀子(編集委員・
イラストレーション)

○外部制作スタッフ/小森直也(ディレ
クター) 宮腰卓也(ライター) 山本祐之(カ
メラマン) 松田圭(デザイナー)

〒277-8564
千葉県柏市柏の葉5-1-5
東京大学大気海洋研究所
(プロジェクトメニュー事務局)
電話: 04-7136-6407
E-mail: teams@aori.u-tokyo.ac.jp
URL: <http://teams.aori.u-tokyo.ac.jp/>

東北マリンサイエンス拠点形成事業(TEAMS) —海洋生態系の調査研究— について

(プロジェクトメニュー)
東京大学大気海洋研究所
大槌湾・三陸沿岸域



文部科学省の支援を受けて2012年1月に開始されたこの事業は、東北大学、東京大学大気海洋研究所、海洋研究開発機構を代表機関・副代表機関とし、全国の研究者が連携して、地震と津波で被害を受けた東北沿岸域の科学的な調査を10年間にわたって行うものです。調査研究を通じて漁業の復興に貢献することを目指しています。TEAMSはその英語名称(Tohoku Ecosystem-Associated Marine Sciences)の略称です。

東京大学大気海洋研究所では、震災後に建造された調査船「グランメニュー」*にちなみ、TEAMS 東大グループの愛称を「プロジェクトメニュー」と名付けました。岩手県大槌町にある「国際沿岸海洋研究センター」を拠点として、調査研究を続けています。

*「グランメニュー」とは仏語で大きな木槌の意

プロジェクトメニューのキャラクター紹介

メニューはプロジェクトメニューをご案内する広報大使、ひょうたんの形をした不思議な生き物です。よろしくお祈りします。

メニューのお友達



グラン博士



赤浜くん



▶ topic

みんなで大事にした沿岸センター

2月末をもって、40年以上に渡り現在の土地にあった沿岸センターが取り壊されます。私がはじめて沿岸センターを訪れたのは大学院修士課程に入学した1995年で、もう20年以上も前になります。当時、すでに建築より20年近くが過ぎていたと思いますが、大学関係の建物とは思えないほど清潔で傷みのない設備で驚いたのを覚えています。その後も毎年、利用するたびにその手入れの良さに感心しておりましたが、2007年3月に教員として赴任してそれが日々の手入れだけでなく、年に一度の職員・学生総出の床磨きとワックスがけで維持されていることを知りました。これはいい運動になるだけでなく、建物に対する愛着も湧くというおまけつきです。そのほかにも夏の草刈、台風が来た後の係船場の掃除、雪かき、センターの筏についたワカメの収穫などなど、沿岸センターならではのさまざまな共同作業がありました。今は大津波による爪痕が残っていますが、館内を歩けば構造材がむき出しの天井、破れた壁、人気のなくなった部屋の上に、様々な思い出が浮かんでいきます。センターが取り壊されるのはやはり寂しいものがあります。(福田秀樹)



震災前の沿岸センター



台風で流れてきたゴミの清掃

特集 大槌から見えてくるもの

東北マリンサイエンス拠点形成事業(TEAMS)

機関代表・木暮一啓教授に聞く

震災から七年が過ぎ、ようやく復興が本格化したところある大槌や三陸沿岸のまち。

そして、漁業復興を目的に十年計画でスタートした「東北マリンサイエンス拠点形成事業(TEAMS)」も事業開始から七年を迎えます。

「このプロジェクトを通して見えてきたのは、単に東北の漁業の町の苦しい状況ではない。むしろ、エネルギーや食糧供給を外に依存している都会の脆弱性と危険性ではないだろうか?」

そう語るのには、TEAMSの設立メンバーであり、また東京大学大気海洋研究所チーム代表としてプロジェクトを牽引し続けてきた木暮一啓代表。

今回の特集では、TEAMSの立ち上げの経緯、東大チームの研究成果、調査研究船「新青丸」のこと、さらには大槌での日々を通じて感じたこと・見えてきたこと……などを語ってもらいました。

インタビューを通して、大槌やこの地域に対する研究者の思いを受け取っていただければ幸いです。

みんなの住む家が
建ってきたわ!



木暮一啓(こくれ かずひろ)

東京大学大気海洋研究所 教授

東北マリンサイエンス拠点形成事業 機関代表

研究分野: 海洋微生物学

文・宮腰卓也

撮影・山本祐之(P3,P5 サケ P7) ほか大気海洋研究所蔵

——最初に、東北マリンサイエンス拠点形成事業（TEAMS）の立ち上げの経緯をお聞かせください。



国際沿岸海洋研究センターの目前に広がる大槌湾とひょうたん島（蓬莱島）
2011年5月撮影時。島の灯台も津波によって流され、町や海に広がった瓦礫の撤去も続いていた

木暮 私は二〇一一年三月二十八日に東大の関係者と共に初めて釜石、大槌地区に入りました。あまりの状況に呆然として、初めはカメラを向けることもできませんでした。ガレキの山の中で、自分は何故ここに居るんだろう、こんな時に研究なんかしていいのだから、と自問しましたが、次第に我々は研究を通じてでしか復興へのお手伝いはできないし、そうすべきだろう、と考え直しました。それが私の出発点です。そして、地震と津波によって大槌の海や海の生きものはどうなってしまったのか、そしてこれからどうなっていくのかを明らかにすることが必要だろうと感じました。私だけでなく、この地域で調査研究を行っていた大気海洋研究所の研究者の誰にも共通の思いがあったはずで、赤浜の国際沿岸海洋研究センター（以下沿岸センター）が津波の直撃を受けて使えず、調査船も流され、電気も通じていない状況の中、五月から大槌湾に出て調査を始めた研究者たちもいました。ただ、千年に一度ともいわれるこの大災害は大槌だけでなく東北太平

復興に向けて全国の研究者が結集

洋沿岸に広がっており、我々だけで調査していくのは不可能でした。そこで、宮城県女川湾を拠点とする東北大学や、東北の沖合域で調査を行っている海洋研究開発機構（JAMSTEC）の中心メンバーなども協議を重ね、協力して研究に当たろうということになったのです。幸い、私たちのこの計画は文部科学省に採択され、翌二〇一二年一月から共同研究プロジェクトとして始動しました。

——TEAMSの中にあって、東大大気海洋研究所チームならではの特色はありますか。

木暮 TEAMSは、東北沿岸域から沖合海域にかけての海洋生態系の調査研究を通じて、東北の漁業復興を図ることを目的にしています。漁業に直結した学問分野という点で、多くの人は水産学を思い浮かべると思いますが、東大チームはむしろ、物理や化学、生物、地学といった基礎研究の分野を幅広くカバーしているのが特色です。

例えば、海には物理的な水の流れがあり、それに乗って窒素やリンなどの化学物質が運ばれて植物プランクトンの栄養になり、それをカキやホタテなどが食べて成長します。つまり、水産資源の豊かさは物理や化学などの要素が複雑に影響しあっている決まるのです。東北沖は非常に生産性の高い海域だといわれますが、その要因を明らかにしたり漁獲の将来予測を立てたりするためには、こうした基礎研究による複合的なアプローチが欠かせません。

さらに私たちのチームでは、震災によって海に流入した有機化合物や重金属などの汚染物質についても継続的に調べています。水揚げされた水産物の安全性は、漁師さんや消費者にとっても大きな関心事

——東北の漁業復興への貢献という観点から、特に力を入れている研究はありますか。

木暮 初めにお話ししたように、私たちは大槌湾を中心とする東北の海の海洋生態系を調べていますが、サケやアユ、アワビなどの重要な水産資源については、それらの生育にかかわる生態系を含めて精力的に研究に取り組んでいます。

例えば、サケは四〜五歳の成魚になると自分が生まれ育った川に戻って産卵しますが、調査を進めた結果、震災から四〜五年後の遡上率が多くの川で大きく減っていることが分かったのです。川沿いに設けられたサケふ化場が被災し、震災の年に十分な稚魚を放流できなかったことが要因と考えられます。ちなみに、ふ化場が無事だった川には例年通りのサケが戻ってきていたことも分かり、サケふ化放流事業の重要性がこの調査によって改めて示されました。しかし、サケの漁獲量は震災前のレベルには戻っておらず、様々な要因が関わっていることも浮き彫



小釜川を遡上するサケ



2012年より毎年開催しているさーもんかふえ（盛岡）
研究者、漁業、行政、企業関係者などが一堂に会する

木暮 はい。特に国際シンポジウムは、TEAMSの研究成果の重要性を、国内だけでなく広く世界にも知ってもらおうという意図で企画・開催しました。海外から招

りになりました。このほかにも多くの研究成果が報告されています。

——そうした研究成果を漁業関係者などに周知していくことも大切ですね。

木暮 私たちも印刷物やインターネットなどで情報を発信する一方、漁業関係者を交えたワークショップなども定期的に開催して研究成果の還元に努めています。

サケ研究の関連でいえば、二〇一二年から毎年開催している「さーもんかふえ」もそうした活動の一つです。そこではTEAMSのサケ研究者をはじめ、若手県の水産技術センター、サケふ化場などの漁業関係者、さらには行政や企業関係者なども集まって、研究成果

の発表や情報交換、漁業者からの質問への応答などを行っています。水産資源の回復や維持を目的にした広報活動の典型的な例です。

——国内外の研究者を招いての国際シンポジウムや、学術シンポジウムなども開催してきました。

木暮 はい。特に国際シンポジウムは、TEAMSの研究成果の重要性を、国内だけでなく広く世界にも知ってもらおうという意図で企画・開催しました。海外から招

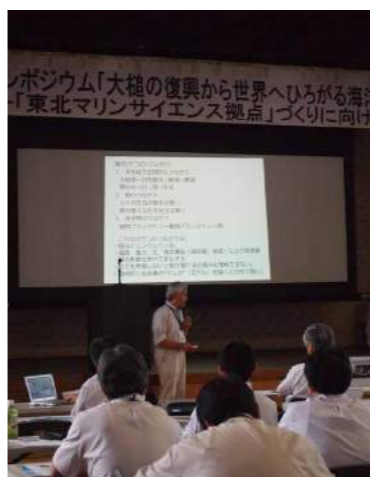
研究成果を地域や世界に向けて積極的に発信

の一つだと思いますが、これまでの調査では、レベル的にまったく問題がないことが分かっています。このように、東北の海や生態系をさまざまな領域から学際的に研究できることが、東大チームの大きな強みといえるでしょう。

また、私たちの研究拠点である沿岸センターは、一九七三年の設置以来の長い研究の蓄積があるため、それらのデータを震災後のものと比較することで、震災の影響をより正しく評価できる利点もあります。ちなみに、私はまだ学生だった一九七五年から大槌に通っていますが、東大チームの他のメンバーも、そのほとんどが震災前からこの地で研究を行ってきた研究者たちです。東大大気海洋研究所以外にも、全国二十以上の大学や研究機関から二〇〇名を超える研究者、大学院生がプロジェクトに参加しているのも他のチームにはない特色だと思います。

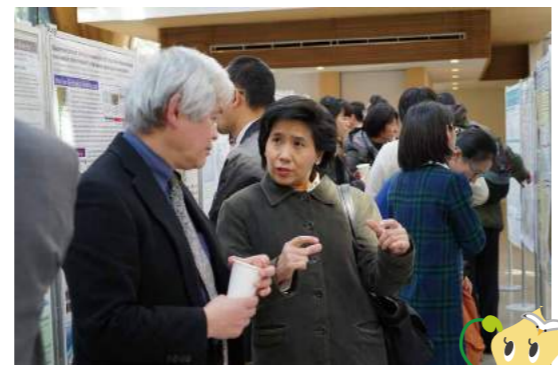


調査研究船「グランメーユ」
有限会社須賀ケミカル産業による震災後の建造船。2011年8月22日に進水した。グランメーユはTEAMS東大チームの愛称でもある



シンポジウム「大槌の復興から世界へ広がる海洋研究」
大槌町城山公民館にて開催（2012.7.16）
東北マリンサイエンス拠点形成事業が本格的に始動した

いた海洋学の大家研究者や地震学の研究者とも議論を行い、私たちの研究の幅広い展開について高く評価していただけたと思っています。



国際シンポジウム Restoration after Great East Japan Earthquake -our Knowledge on the Ecosystem and Fisheries (2016.3.2-4)
ポスターセッションの様子

また、私は海外の学会やシンポジウムにもできる限り出席し、これまでに十カ国近くの国や地域でTEAMSの活動を紹介してきました。実は、大きな地震や津波の発生後、その影響についてきちんと調査研究が行われた事例は世界的に見てもほとんどないのです。二〇〇四年のスマトラ沖地震の際には、タイやスリランカで調査研究が行われましたが、学際的・継続的なデータは得られていません。チリ地震の調査でも同様です。そうした点からも、TEAMSの研究でも同様です。そうした点からも、TEAMSの研究成果やその意義を世界の研究者に知ってもらうことは非常に重要だろうと私は考えています。

大槌から話を組み立てると、同席した人々から立て続けに質問がきて、議論は海の話を超え今の日本の話にまで及びます。普段の自分の専門の学会ではそんな話は出ませんが、自分が無意識のうちに東京の人としてふるまってきたことに気づかされます。TEAMSのプロジェクトがスタートして以来、大槌町の名も世界中に広まりつつあります。

東北沖の調査研究で活躍する「新青丸」

—プロジェクトが始まった翌二〇一三年には、学術研究船「新青丸」も竣工しました。震災後の東北の海洋生態系を調査することを目的としたこの船に、木暮代表は首席研究員（リーダー）として乗船してきました。

木暮 東大チームでは、年に四回、新青丸に乗船して三陸沖などで定期的に調査・観測を続けています。海中の水温・塩分・密度などを観測している物理系の研究者もいれば、海水の様々な化学物質を分析する研究者、また、海中のプランクトンや、海底の堆積物・底生生物などを採取している生物系の研究者たちもいます。このほかにも、さまざまな研究目的の研究者が適宜利用しています。こうした調査内容や研究目的を一年分の航海計画書にまとめ、前年度の秋までに申請書を書き上げて応募するのが、チーム代表である私の役目でした。

主席研究員として乗船する場合には、航海調査のタイムスケジュールも作成しなければなりません。航海期間や出港時間、調査・観測を行う場所やそれに要する時間などをそれぞれ勘案して、十分刻みで予定を組んでいきます。かなりの航海経験を積まなければできない作業です。また、航海前には船舶担当者と事前打ち合わせを行います。

—船での調査・観測は、船に乗る前の準備段階から大変なのですね。

—TEAMSの活動開始から七年になります。これまで東大チームを率いて大槌を中心とした東北沿岸域で活動を続けてこられての感想は？

木暮 私は水産学科の出身ですが、大気海洋研究所では長年、水産とは程遠い海の微生物を研究してきました。実を言うと自分の研究が社会にどう役立つかなど、考えたこともありませんでした。ところが、漁業への貢献を目的にしたこのプロジェクトに携わったことで、社会との接点や社会還元ということを強く意識するようになりました。



赤浜地区の高台に建設中の国際沿岸海洋研究センター
写真は2017年12月撮影。本年3月に現在の場所から移転し、新オープン予定している

私が大槌の町に来る時、いつも楽しみにしているのが地元で獲れる新鮮な海の幸です。おいしい日本酒との組み合わせは最高。でも同時に「これからもずっと



南部鼻曲がり鮭を塩引きにした新巻鮭
11月にもなる鮭鮮魚店や一般家庭の軒下にも新巻鮭を干す風景が見られる



木暮 出航後は、一番の気がかりが天候です。低気圧の進路を避けて大きく迂回したり、強風が静まるまで港に待機したりして時間をロスした結果、いくつかの調査・観測を中止せざるを得なくなることもあります。ちなみに新青丸の走行速度は時速二〇キロ少々なので、一〇〇キロ沖に出るには片道約五時間。また、海底深くから泥を採取する調査などは、作業開始から終了までに数時間を要します。天候の状況を見ながら、船側と相談しつつどこまで実施できるか判断するのも主席研究員の重要な役割です。

—新青丸の船籍港は大槌港。二〇一四年と二〇一五年九月には、大槌港の魚市場前で一般公開も行われました。

木暮 あの時は船内見学のほか、私たちの研究成果を紹介するパネル・標本の展示ブースなどを置く一方、もちまきや虎舞などのイベントもありました。来場者の皆さんも楽しんでいただけたのではないかと思います。残念ながら、昨年と一昨年の一般公開



東北海洋生態系調査研究船「新青丸」2013年6月に竣工、10月には船籍港の大槌漁港で披露式典が行われた



大型CTD採水システムによる観測
海水の塩分、水温、深度などを連続的に測定しながら、目的の深度で海水を採取する

は台風の影響で中止になってしまいましたが、今後もちょうじた機会を通して地元の方々の交流を深めていければと考えています。

—TEAMS 東大グループの研究拠点となっているのが赤浜の沿岸センターです。この春には、いよいよ同地区の高台に建設中の新センターがオープンします。



大槌漁港での新青丸一般公開 (2014.9)

木暮 震災後は、被災した建物の三階部分を改修して何とか使ってきました。新センター完成後は、充実した環境の下で、TEAMSの研究活動もさらに活発化することと思います。遠方から来る他大学や研究機関の研究者も利用しやすくなるのではないのでしょうか。さらに、一階に自由に入力りできる「海の勉強室」を設けるなど、地元の方々とのつながりを強く意識した設計になっています。オープン後は、ぜひお気軽にお立ち寄りいただきたいと思います。

2. 学術研究船 （表紙参照）の答え メニューのクイズにチャレンジ



モデルを提示していますが、一次産業についてはほとんど言及していません。また、東京大学が掲げる「ビジョン2020」を見ても、一次産業に対する視点がまったく欠落しています。

今の日本の食料自給率は三〇パーセント台という非常に深刻な状況にあり、とりわけ東京などの大都市は、食料やエネルギーのほとんどを外からの供給に頼っています。しかし、もしそれらの供給が何らかの要因でストップしたら、東京も日本も大混乱に陥ることは間違いありません。そう考えた時に、これから私たちが目指すべきなのは、都市への集約ではなく、むしろ一次産業を中心とした自給自足型の地域コミュニティの形成ではないかと思うのです。

—大槌での日々を通して、日本の将来といったもっと大きな問題が見えてきたというわけですね。

木暮 今お話ししたのは、あくまでも私の個人的な考えです。ただ、地方と都市についての問題はさておいても、TEAMSには、東北の漁業者に元気になってもらいたいと頑張っている研究者が大勢います。プロジェクト終了後も研究を継続すると公言している研究者も少なくありません。こうした私たちの思いが、近い将来、研究活動の成果として実を結び、東北の漁業振興に微力ながらも貢献できることを願っています。

—ありがとうございます。



一次産業を基盤にしたコミュニティづくりを

と食べ続けられるだろうか」という不安が頭をよぎり、だからこそ漁業を見つめ、研究を通じて漁師さんたちに協力していく必要性を感じます。この感覚、つまり研究活動を、生活者の目線や社会とのつながりの中で考えることができるようになったのも、この町のおかげだと思っています。

—TEAMSのスタート後は、地域との関係強化にも努めてきました。

木暮 町役場や県庁、水産技術センター、それに町の魚屋さんなど、いろいろなところにおじゃましてきています。顔を出して「よろしく」とごあいさつするだけなのですが、プロジェクトを円滑に進めていくためには大事なことです。町の漁師さんたちも、最初のうちは「そんな研究ですぐ魚が獲れるなら苦労はしねえ」と、遠くから眺めていたかもしれないが、今では私たちの研究の意義を理解してくれる方も増え、漁師さんたちとの距離も少しずつ縮まってきたように感じています。

ところで、大槌という地域に身を置くようになって、最近特に思うのは、多くの人が漁業や農業など一次産業の大切さを見落としているのではないかといいことです。例えば、元若手県知事の増田寛也氏は自著の中で、近い将来、人口が都市部に一極集中し、地方は急激な人口減少により消滅の危機が訪れると述べた上で、地域が生き残るためのいくつかの

スナメリ



東京大学 大気海洋研究所
兼務教授 白木原 国雄(しらかはら くにお)

スナメリは日本では東北から九州までの身近な海に棲む鯨の1種です。多様な地方名がついていて、人々に親しまれています。



宮島水族館にて(撮影:入江貴博)

スナメリは鯨の仲間

スナメリは体長2m未満で日本近海では最も小さい鯨類です。口のまわりが前方に突出しておらず、丸い頭をしています。背びれはありません。生まれたばかりの子は黒褐色ですが、成体は灰褐色です。洋上では光の加減により白っぽく見えたり、褐色のように見えたりします。ふつう1~3頭程度の小さな群れをつくりますが、まれに数十~百頭程度の大きな群れとして集まります。泳ぎは静かで、跳躍して体全体を海面上に出すことはめったにありません。移動する船に近づいてくるともめったにありませんが、船尾波にたわむれることはあります。

身近な海に棲む

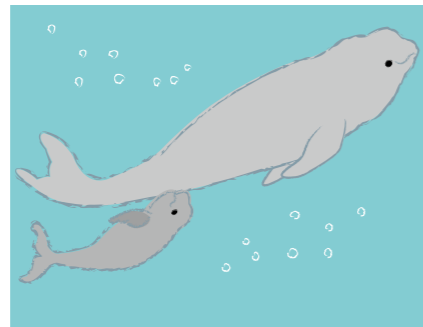
日本では仙台湾を北限として、伊勢湾・三河湾、瀬戸内海、有明海・橘湾、大村湾などの内湾に主に分布しています。例外は宮城県から千葉県沿岸域で、太平洋に面した外海にも分布しています。分布域は水深50mより浅い所、とりわけ遠浅で底が砂場・泥場の所にほぼ限定されています。千葉県銚子市の漁港やマリナーでは、海岸から肉眼で観察できますし、岸から数mの所に來ることもあります。



日本におけるスナメリの主分布域

スナメリの一生

スナメリは1回の出産で1頭の子しか産みません。生まれたばかりの子の長さは80cmくらいです。子はしばらく母親からミルクをもらって大きくなりますが、生まれて半年くらいで離乳が始まり、自分で餌をとるようになります。この時期の主な餌は底生の小型魚類やイカ類です。一方、成長するにつれて餌生物の種類は増え、魚類、イカ類、エビ類など、浮いているものから底にいるものまで様々な動物を食べます。成熟するのにメスで6~9年、オスで4~6年くらいかかり、寿命は30歳前後と考えられています。



スナメリの未来は明るい?

ナミノウオ(波の魚)、デゴンドウ、スンゴザメ、これらはスナメリの地方名の一部です。種々の地方名があることは本種が人々の目に触れる機会の多い普通種であることを表しています。ちなみに『広辞苑』は漢字名を「砂滑」としています。これを与えた人は、単に当て字を使っただけなのかもしれません。しかし底が砂である海で波と波の間を滑るように泳ぐ、あるいは砂の底に向かって滑り込むことを想定すると、本種の特徴をとらえた漢字名です。日本近海のスナメリには遺伝的交流の乏しい集団が複数あることが明らかになっています。日本近海を広く回遊

するタイプではありません。保全はこのような集団単位で考える必要があります。本種は低出生率・低死亡率型の生き物であり、人為的要因が作用しない時には年あたり4~6%くらいの率でしか個体数は増えません。個体数が半減すると、元に戻るのに10年以上かかります。

東日本大震災の直後に仙台市の田んぼで1頭のスナメリが生きたまま発見されています。おそらく津波により仙台湾から陸に運ばれたのでしょう。大震災は沿岸域の生態系に大きな影響を与えており、沿岸域を利用する本種の生息環境劣化が起こったと思われます。

このようなめったに起こらない自然現象とは別に、本種はたえず人間活動の影響を受けています。例えば、東京湾は本種にとって好適な自然環境を持っていますが、今ではめったに発見できません。本種に悪影響を与える人為的要因として、埋め立てによる浅海域の消失、海洋汚染、海上交通、船舶との衝突、漁網混獲などが考えられます。個体数の減少はこれら要因が複合的に作用したためと考えられます。1つの要因の負の影響を取り除いても必ずしも本質的な問題解決に至りません。それでも、個体数予測の研究から、人為死亡率をわずかに減少させるだけで絶滅確率が大きく減少するという心強い結果が示されています。

身近な海からスナメリが消えて、その地方名がすたれていくようなことが起こらないことを願っています。



船上から撮影

写真でふり返る沿岸センター 1973~2017



“赤浜の東大”こと国際沿岸海洋研究センターは、東北マリンサイエンス拠点形成事業・東大グループ(プロジェクト名)の研究における中核でもあります。前身である大槌臨海研究センターの第一期工事が1975年2月に竣工して以来、40年以上の長きに渡り、全国共同利用研究施設として多くの研究者の研究の場となり、地域の皆様のご協力を頂きながら発展してまいりました。

2011年3月11日の東日本大震災の際に発生した大津波による被害を受けながらも、被害の少なかった3階部分を改修しながら活動を続けてまいりましたが、2018年2月末をもって、現在の場所から、大槌町赤浜地区の高台へ移転いたします。

皆様、これまでありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。



大槌臨海研究センターとして開所(1977.6)



用地が決定した1973年頃。初期の研究実験棟は現在の半分(1,040m)だった



天皇后行幸啓。大槌町で『第17回全国豊かな海づくり大会』開催。センターを視察された(1997.10)



標本室(2005.7)



国際沿岸海洋研究センター銘板除幕式(2003.4)



国際共同研究の推進拠点として組織が改変された(2003.4)



米国カリフォルニア州フォートブラック市 交換留学生の見学(2003.7)



八幡神社祭礼(2009.10)



東北地方太平洋沖地震にともなう12.2mの大津波が襲来し、3階の窓付近まで水没した(2011.3.11)



濱田純一 前大槌町長が被災状況を視察。3階を仮復旧させて調査研究が継続された(2011.4)



大槌漁港にて海洋調査研究船「弥生」の竣工式(2013.11)



大槌学園の見学。5年ぶりに一般公開も開催された(2015.7)



ある日の実験室(2017.4)



Ce-Caféの店内に立つ敬一さんと智子さん。お店の理念として、5つのC (Chance, Challenge, Choice, Community, Change) と4つのE (Enjoy, Evah, Emotion, Empower) を掲げている

「食」と「農」でまちを元気に —この店から新たなチャレンジを—

カフェレストラン「Ce-Café」 阿部 敬一さん 智子さん

大槌学園の東南、静かな住宅地の一角にある「Ce-Café(シーカフェ)」は、オーナーシェフの阿部敬一さんと妻の智子さんが、二〇一五年に自宅の敷地に開業したカフェレストラン。「単に食事を提供するだけでなく、いろんな人が幅広く活用できるコミュニティの場」と、ランチやディナーの通常営業以外にもさまざまな取り組みをしています。

料理の道を志し 中国料理店などで修業

店のメニューは中華・エスニック料理が中心。地元産の食材にこだわり、魚介類は大槌湾で水揚げされたものを、また、野菜やハーブ類は、店の目前で農業を営む実家の畑から食べごろのタイミングで収穫したものを使っています。「大槌で本格的な麻婆豆腐やガバオが食べられるとは……」と感激して店の常連になったお客さんもあるそうで、実は赤浜の国際沿岸海洋研究センターの関係者の中にも、シーカフェの熱烈なファンが何人もいます。

敬一さんが料理の道を志したのは高校時代。実家の畑仕事を手伝われるのが嫌で、「このまま家業の農業を継ぐよりも、好きな料理の腕を磨いて地元で店を開きたい」と、高校卒業と同時に大阪の専門学校に進学。その後、横浜中華街の有名中国料理店などで修業を重ね、さらに店の経営に関する知識を

学び、開店資金を貯める目的で、料理とは無縁のランチャイブビジネスの世界にも飛び込みました。「経営者向けの勉強会で、同じく参加者だった妻と出会うことができました」とはかむ敬一さん。そして、三陸大槌のおいしい食の素材を東京方面で紹介・出荷することをしたいと地元に戻りました。

ところが、店を開く準備を進めていた矢先に震災に見舞われ、開店の話は白紙に。しかし震災後、敬一さんは町の有志らで「おらが大槌夢広場」を設立します。代表として、仲間や妻の智子さんと復興食堂や復興ツーリズムの運営に携わってきました。「大槌の町づくりに自分たちで何かできることを」そんな思いで活動を続け、代表を退いた後、ようやく今の店をオープンすることができたのです。

店のレンタルや農業体験など ユニークなプランも用意

シーカフェを開業するまでにはずいぶん遠回りした阿部さん夫妻ですが、「その間、復興活動などに関わる中で、地域に密着した店づくりのアイデアなども練ることができました」と敬一さん。

その中から生まれたシーカフェならではの企画プランもあります。飲食業に興味のある人や、自慢の料理を提供したいと考えている人のために、店をまるごとレンタルする「ワンデイシェフ」もその一つです。いきなり自分の店を持つのは資金的にも大変ですが、このプランを利用すれば、自分の夢に向けた第一歩を気軽に踏み出すことができます。

一回限りの利用ももちろん可能で、漁師の青年が自分で獲った魚介類を料理して提供したり、農家の奥さんが旦那さんの仕留めたクマやシカの肉を持ち込んで食事会を開いたり、「食」を通じて町民が



シーカフェ号に立つ敬一さんと智子さん。キッチンカーによる販売は敬一さんのお姉さんが担当



ある日のメニュー
左：サケのピリ辛甘酢炒め
下：ガバオライス



家業は継がないと思っていたが、今では農作業体験を提供する側に。「この土地の野菜の美味しさを知ってほしい」



看板表面に畑、裏に海が描かれたこだわりのデザイン



「おいしいラーメンを作って食べたい」と異業種の若者たちが店で試作を重ね、月1回ほど営業している「大槌ラーメン研究会」。ラーメンデーを楽しみにしているお客さんも増加中。

なつかしいわ!



今日のシェフは?



テントでオープンした復興食堂。本プロジェクトの大槌シンポジウムでも懇親会を開催した(2012.7.16)



料理をふるまう敬一さん



キッチンカーを駆使して 大槌や釜石へ温かいランチをお届け

前号の「街歩き」でも紹介しましたが、昨年六月から一般社団法人COLEREと大槌町が協働して、「おうちキッチンカープロジェクト」が始まりました。この取り組みにも阿部さんは進んで手を上げ、大槌町役場や釜石市役所付近などで週五日、日替わりランチを提供しています。

「キッチンカーを始めた理由は、いろいろな食のイベントにも活用できると思ったのと、もう一つはやはり災害への備え。いざという時に支援が届きにくい場所などにも温かい食べものを提供できますから」

そう話す敬一さんの頭には、このほかにもアイデアがたくさん詰まっています。「まずは、農業体験の希望者を長期滞在でも受け入れられるプランや体制づくり。また、大槌には余っている農地がたくさんあるので、それらを市民農園として活用する取り組みなども将来的には考えています」

